



2026年9月9～10日に函館水産試験場試験調査船「金星丸」で実施した噴火湾周辺海域の水温・塩分・溶存酸素の観測結果をお知らせします。
QRコードからもアクセスできます→

- ・海面付近の水温は21℃前後で平年並，前年同時期より約3℃低い
- ・湾内の30m層は一部地点を除き前年同時期より高く，30m以浅の水温との鉛直差は小さい
- ・津軽暖流水は湾内に流入しておらず，80m以深の貧酸素は継続する見込み

【水温の鉛直分布】

噴火湾内の深度10mの水温は20～21℃で前年同時期より3℃低く平年並でした（図1）。深度30mの水温は前年と比べ高く，深度10～30m層における水温の鉛直差は前年や平年と比べると小さくなっていました。

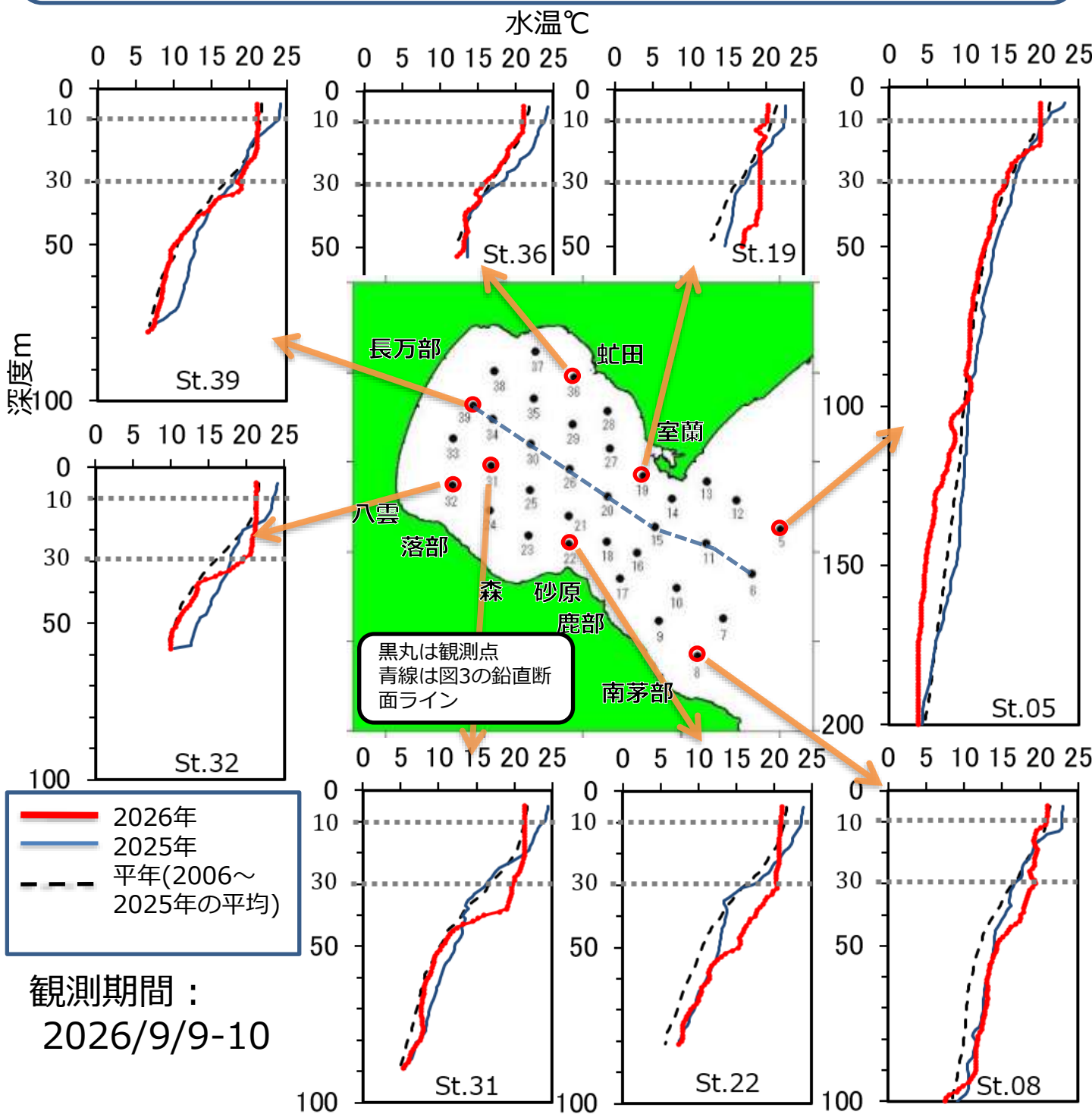


図1 噴火湾各地先の水温の鉛直分布

【水温、塩分の水平分布】

噴火湾内深度10mの水温は20～21℃台で、湾奥で高くなっていました（図2A）。深度10mの塩分は湾内で32.0前後、湾外では32.2～33.8でした（図2B）。

深度30mでは水温15～20℃台（図2C）、塩分33.6以下（図2D）でした。前年同時期（図2E, F）は水深30mにおいて暖流系水（水温6℃以上、塩分33.6以上）に覆われていましたが、今回の深度30mの水温は湾外で1～3℃程度高く、塩分は湾内外で低くなっており、**今年は昨年同時期に流入していた暖流系水が見られず、湾内への流入が遅れている**と考えられます。

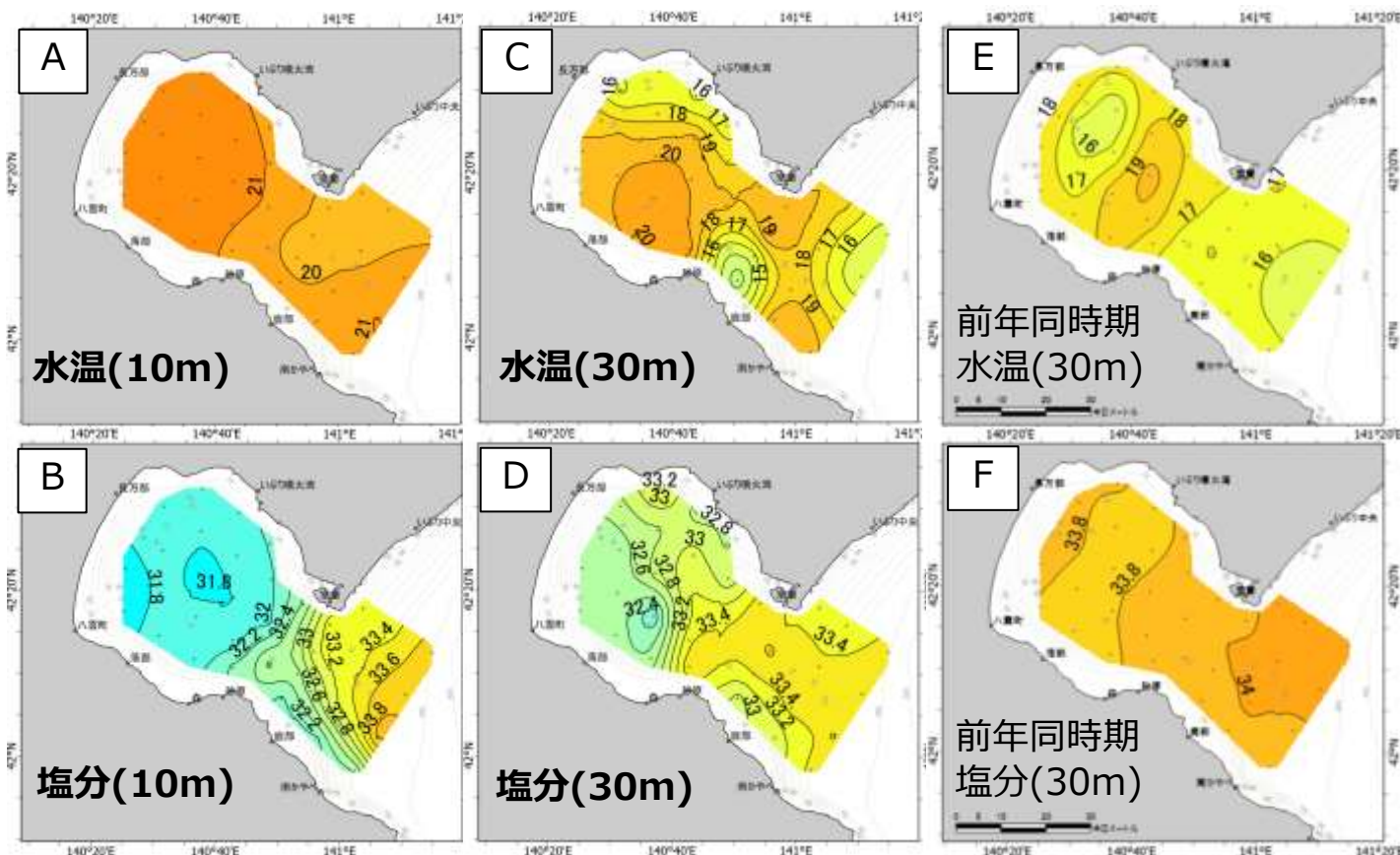


図2 A:水温(10m), B:塩分(10m), C:水温(30m), D:塩分(30m), E:前年同時期の水温 (30m) , F: 前年同時期の水温 (30m)

【海底の溶存酸素の推移】

湾内定点における海底の溶存酸素量は7月以降2.0 ml/Lを下回り、貧酸素状態になっていました（図3）。例年夏～秋に湾外中層から湾内に流入する暖流系水が今年は見えていないことから、80m以深の貧酸素の解消が例年よりも遅れる恐れがあります。

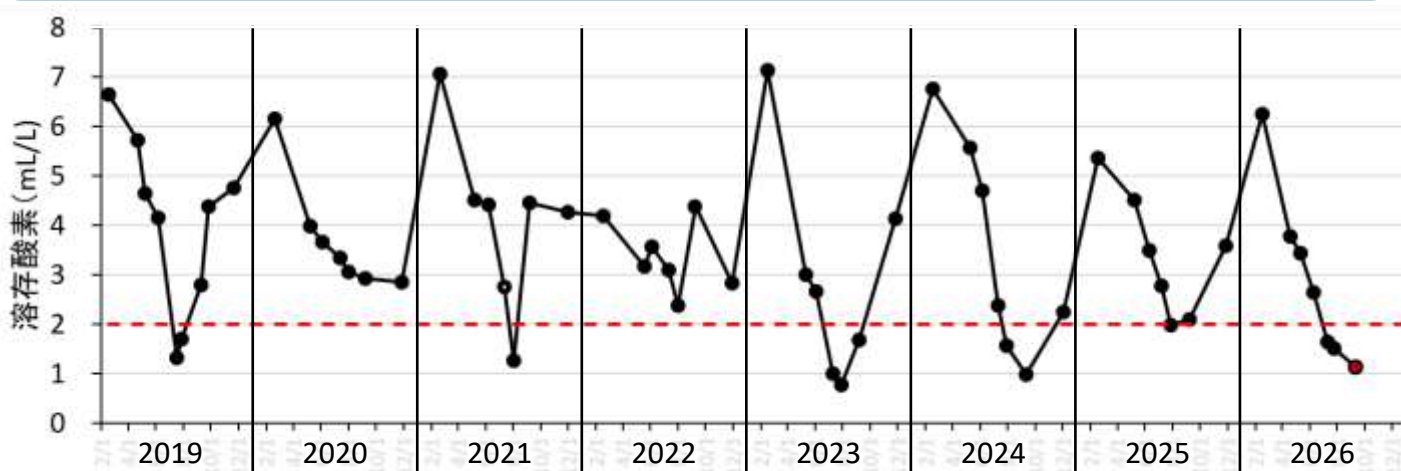


図3 湾内 (St.31) における海底の溶存酸素の推移（赤破線は貧酸素の基準2ml/L）

【水温、塩分、密度の鉛直断面分布】

湾内表層は水温20～21℃で、前回より昇温しましたが前年同時期より低くなっています（図4）。塩分は湾内では33.2以下、湾外で33.2～33.6となっています。前回と比べ湾外の塩分は高くなっていますが、前年同時期に湾奥まで流入していた**暖流系水**（水温6℃以上、塩分33.6以上）はほとんどみられません。密度（海水の重さ）は50m以浅では湾外で大きくなっていますが、60m以深では差はみられません。

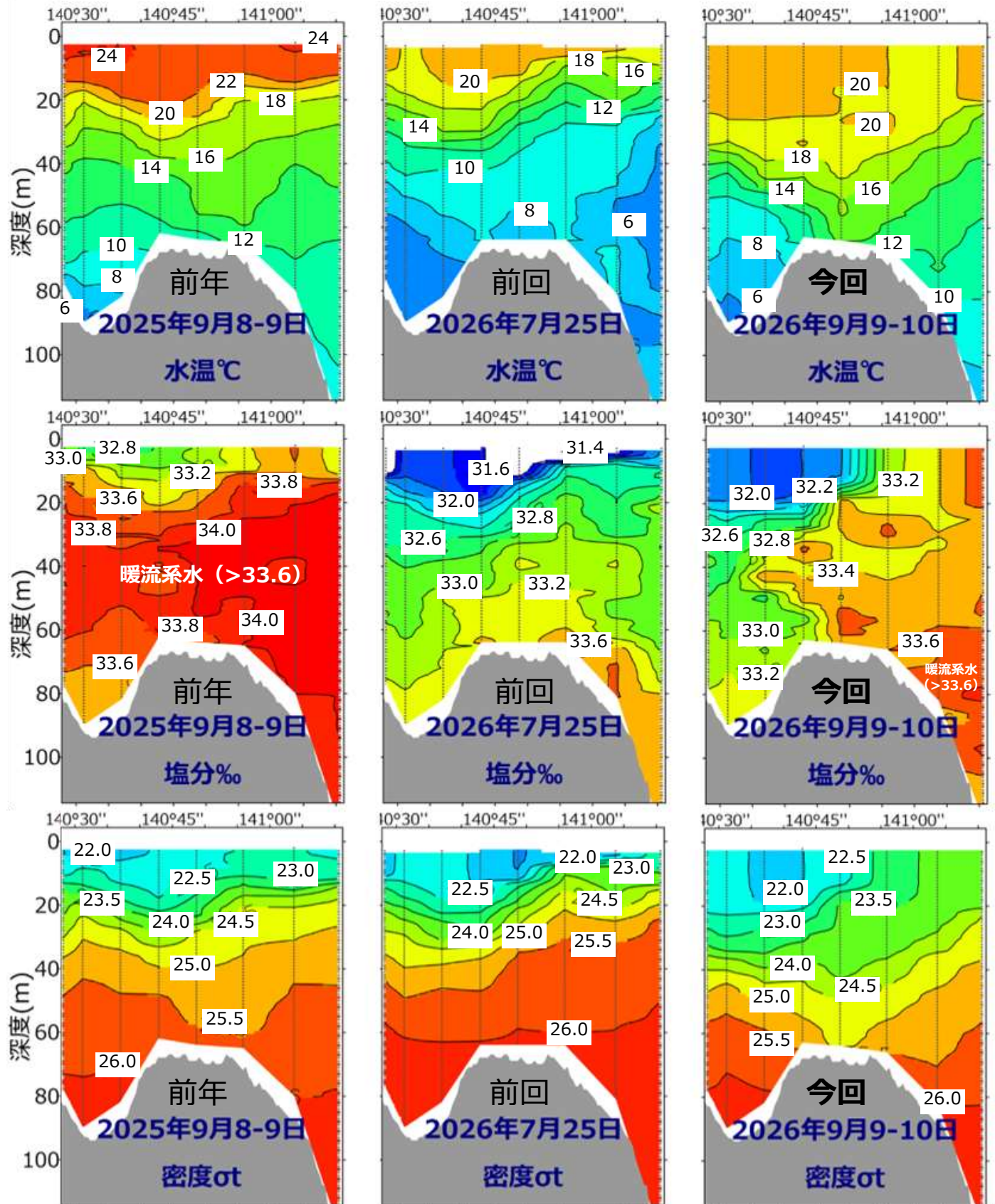


図4 水温・塩分・溶存酸素の鉛直断面図（左：前年同時期，中：前回の結果，右：今回の結果）

※図中破線は観測点，鉛直断面の位置は図1の青破線を参照